博士論文要旨

多民族混住地域における民族意識の再創造

－モンゴル族と漢族の族際婚姻に関する社会学的研究－

本研究は、族際婚姻に関する社会学的な実態分析を通じて、民族混住地域におけるモンゴル族と漢族の意識変容の考察を試みたものである。そこでは以下のような構成により議論を進めた。

第 1 章では、まず赤峰市の異なる生業形態をもつ 4 つの地域を研究対象地域として設定するに至った経緯及びその妥当性に関して議論することから説き起こし、次にその各地域の概観及び各地域別の社会状況の諸特徴を抽出した。その上で、地域の諸特徴は、族際婚姻という多民族混住地域に特有の社会現象が形成されていく上での重要な背景であるとともに、それがしばしば地域別に異なった様相として立ち現れる背景であるとの仮定に立ち、主として経済活動や人口構成の差異に着目して、その実態をデータとして示した。また、こうした異なる社会状況は、一方では族際婚姻を加速的に促進させる諸条件を準備しており、しかし他方では族際婚姻を漸進的に進めるか、遅滞化させている諸条件として作用しているのではないかということを仮説的に打ち出した。

第 2 章では、現地調査の結果とその分析に基づいて、様々な視角から族際婚姻の実数と割合（以下、これらを「族際婚姻の数値」とする）を提示しつつ、モンゴル族と漢族の族際婚姻の動態を明らかにした。族際婚姻の数値は、先行研究で指摘されるほど単純で漸進的な増加が見られるのではなく、複雑な推移が見られる。具体的には、族際婚姻の数値には顕著な地域差が看取され、都市、鎮、農村、牧区の順に高くなっている。それと同時に、民族間の差も見られ、牧畜地域では漢族の族際婚姻率がモンゴル族より高く、都市、鎮、農村では逆にモンゴル族の族際婚姻率が漢族よりも高くなっている。また、各年代別による族際婚姻率の推移は、都市では大きな変化が見られ、鎮では緩やかに変化するものの、農村と牧区では緩やかに増加している。以上に加え、性別による差についても指摘できる。都市、鎮、牧区では、漢族の男性とモンゴル族の女性の族際婚姻が多く、農村に限ってはモンゴル族の男性と漢族の女性の婚姻が多い。これらは本稿が初めて様々な未刊行資料や現地調査を加味し、数値により指摘したミクロな実態である。この結果により、本稿において独自に提起した、族際婚姻の分析における社会的背景の影響を強調する視座の重要性

を補強することができた。

第 3 章では、族際婚姻を成立せしめる要因分析の一環として、文化的背景を考察した。まず、民族混住の進行がモンゴル族と漢族の文化を変化させていることを明らかにするため、現地調査で得たデータや当該地刊行の資料を用いて、言語、飲食、慣習の分析を行った。その結果、調査地のモンゴル族と漢族はそれぞれの特徴を維持する一方で、相互の文化も受容することで差が縮まり、折衷的な文化を創出していることが明らかとなった。

こうした民族文化の相互浸透と影響は、族際婚姻の成立や増加を促しているといえるが、その反面、民族の伝統文化（それはしばしば「創られた伝統」であるが）への執着は族際婚姻を遅滞化させている要素にもなる。また、モンゴル族と漢族の族内婚姻と比べ、族際婚姻は両民族の特徴を相対化し、「民族文化」なるものを柔軟な形で相互に吸収する素地を形成し、両民族の固定的な文化、慣習から脱出しようとする意識の変化を促す傾向も読み取れる。以上から、族際婚姻は民族文化の融合の結果であるとともに、融合を促す契機でもあることが検証された。

第 4 章では、族際婚姻を成立せしめた社会的背景を分析した。族際婚姻は単なる文化的な産物ではなく、社会的要素にも左右される。前述したように、生業形態や民族の人口割合の差異は、族際婚姻の数値に地域差を生じさせているが、それに加え、交通手段の発達、産業の発展、人口移動に伴う都市化の進行といった地域差も同様の結果に働きかける要因である。また、人口政策、少数民族政策、民族所属の変更、行政区分と婚姻登録範囲の変化などの国家や地方の政策が、文化的要素以上に族際婚姻の成立とその数値の変化に影響を及ぼす要因であることを指摘した。要するに、民族文化の相互浸透により族際婚姻は発生し、その数値は緩やかに増加するが、そのことに加え、人為的かつ社会的要素の影響が族際婚姻の数値に顕著な変化をもたらす。都市化が進んだ地域であればあるほど、族際婚姻は社会的要素の影響を受けやすいことが併せて検証された。

第 5 章では、族際婚姻の成立に関わる意識の側面の背景を分析した。個々人の民族に対する態度や意識も族際婚姻の数値の変化に影響を及ぼす。人々は、婚姻条件に関わる意識の上で、民族所属を重視しなくなればなるほど、族際婚姻に対する肯定的な見方が強くなり、族際婚姻の数値の増加を促す。これは婚姻関係の成立にとり、人々の民族所属を強調する度合い及び族際婚姻に対する賛否の意識の度合いが、族際婚姻の変化に影響を及ぼしていることを意味している。こうした意識は、族際婚姻という事象に対する個々人の体験から生じるものであり、また直接間接に族際婚姻を見聞した結果から生じる自他認識の変

化によって形成される。こうして一旦形成された意識は再びある経験によって変化し、その変化した意識とそれが社会に与える影響が族際婚姻の実態に影響することが実証された。

第 6 章では、族際婚姻のもたらす社会的影響を家庭内文化や親族関係から考察した。調査地の人々は祭祀や室内装飾において、必ずしも所属民族の伝統や特徴を選好しない。それよりは折衷的な形式や時代の流行に合わせる傾向が主流である。族際婚姻者の場合、それがさらに顕著である。族際婚姻者は族内婚姻者に比べ、所属民族の伝統や特徴を相対化し、あるいは両民族の伝統や特徴を部分的に継承するか折衷させる家庭が多く見られる。また、直系親族の往来という事象に視点を置いて分析をした結果、族際婚姻者は族内婚姻者ほどに直系親族間の往来が頻繁でない反面、族際婚姻者は直系親族関係を中心としない社会的ネットワークを形成していることが検証された。このことは族際婚姻が地域社会の人的ネットワークの拡大や多様化に作用している実態を浮かび上がらせていると当時に、族際婚姻家族の次世代に対して民族の枠に固執しない社会的ネットワークを自ずと準備させることに結果しているといえる。

第 7 章では、族際婚姻のもたらす社会的影響を民族自体の構成要素の多様化や民族意識の変化の側面から考察した。第一に、族際婚姻という事象は民族の構成要素を多様化させている。つまり、族際婚姻とは単に異なる民族間の婚姻ではなく、民族所属を変更した者が、元の民族所属の者と婚姻する場合にも用いる概念である。従って、族際婚姻は従来のモンゴル族＝モンゴル人、漢族＝漢人などの定義と現実の民族の内実との不一致に作用する。また、漢文化的モンゴル人やモンゴル文化的漢人とでも呼ぶべき人々を生み出されている。第二に、族際婚姻家族内の各世代を比較し、世代間の民族意識の変化について考察するなら、族際婚姻により、族際婚姻者の民族意識が希薄化する場合とそうではない場合がみられるが、族際婚姻家族の次世代は、民族意識が複合化するか曖昧化し、固定的な「民族」概念では捉えきれない意識を新たに作り出していることが判明する。

以上の論述に即して考究するならば、モンゴル族と漢族の族際婚姻は、「複合的かつ曖昧な」民族意識を持つ世代を創造しており、また彼・彼女らは、両親（族際婚姻者）には殆ど見て取ることのできない新たな民族意識を創造させているといえる。これは、文化の可変性の結果であり、族際婚姻のもたらす民族意識の変化の内実であると結論づけられる。その内実、すなわちモンゴル族の新たな民族意識とは、次の二つの内容を含んでいる。一つは、モンゴル族と漢族の民族意識が複合化し、曖昧化して形成された「揺れ動くモンゴル」民族意識であり、今一つは、もっぱら社会環境の中で人工的に創られ従来にはなかっ

た「新モンゴル族意識」である。

以上、本研究の特質は、第一にフィールドワークに基づき、既存研究により明らかにされなかったモンゴル族と漢族の族際婚姻の実態を明らかにしたこと、第二にその分析から民族意識が再創造されているプロセスを究明し、族際婚姻と民族意識の関係の中で、内モンゴルにおける多民族地域社会の実情を明らかにしたことである。そして第三に、本研究では族際婚姻を通じて民族意識の変化を考察する際に、エスニック・グループ間の婚姻とエスニシティの関連性に対するゴードンやソラーズのエスニシティ研究の業績や課題を踏まえつつ、独自の実証分析を通じて、理論構築を行った。換言すれば、フィールドワークから得られた一次資料であるアンケート、インタビュー、婚姻統計資料などを用いて、ソラーズが文学・文化の分析を通じて提示したエスニシティ理論を、内モンゴルの社会の実情分析をもって社会学的に位置づけたということである。その際の独自性は、生業形態と人口割合に着眼し、調査データに対して詳細な分析を行ない、理論研究に有力な論証を与えた点である。また、ソラーズは人種、宗教的集団であるエスニック・グループは新しいエスニシティを再生産していることを提示したが、本研究では、ソラーズの指摘した要因以外に、人為的・社会的作用によっても民族や民族意識が再創造されることを検証した。

以上、本研究の学問的意義は民族集団の外的、人為的、社会的な力によっても民族意識を新しく創り出すプロセスとその実態を明らかにし、多民族混住社会や多民族混住国家の社会学的研究に一定の有効性を提示したところにあるといえる。